



土浦高等女学校校舎(1945年当時の正面玄関と奉安殿)

1899(明治32)年、土浦中学の校舎(立田校舎)として建てられたもの。土中が1905年に真鍋台校舎(現土浦一高)に移転後は、土浦高女の校舎として使われることになり、1948年からは、土浦二高の校舎として使用された。1963年、新校舎建設に伴い、取り壊された。

戦後の学制改革の中で

昭和20年3月の東京大空襲に遭い、女子聖学院から土浦高等女学校に転校した栗栖(大竹)恵子さんは、動員中の第一海軍航空廠で終戦を迎えました。戦後は土浦高等女学校、新制土浦二高、茨城大学に学び、教員の道に進まれました。今号では、2018(平成30)年10月に、高21回松井泰寿・鴻巣茂が旧本館校長室で伺った、戦後の学制改革の中で、栗栖さんの学校での日々と教員生活の一部とを紹介します。文中の【 】内は筆者による注記です。

戦後の学校生活

1945年9月に立田町の学校【1899(明治32)年に土浦中学として建てられた。】に戻ると、校舎の天井は、焼夷弾が引掛かると防ぐために取り外され、上を見上げると鳩が飛んでいたので覚えています。授業は、それまで使っていた教科書の墨塗りから始まりました。暫くすると、新しい教科書が配られました。新聞紙を折り込んだような粗末なものでした。

ある日、私は、教室で憲法の本を手にし、「戦争を放棄する。武器を持たない。」という箇所(第9条)を読み、あの苦しかった日々を思い出し、戦争の無い、新しい時代になるのだ、と胸が震え、深い感動を覚えました。疎開して来た人も多く、生徒数は急増していましたが、動員生活で生死をともにした地元の生徒たちとすっきり仲良くなり、楽しい学びの日々が蘇りました。

戦後【疎開生徒で土浦中学は満杯になっていた。】土浦高女にも男子生徒が編入されて来ました。初めての男子生徒で、学校側は相当気を遣ったようで、「一緒に帰ってはいけません。室内で二人きりにならない。」などの注意をしていました。そうした注意に対して、私たちはみんな「自分たちは、信用されていないのだ！」と憤っていました。

10月初めに、東京都の学童集団疎開引揚げの第1陣が帰京した、と新聞で報道されました。その後、疎開先の児童が栄養失調で亡くなった、との情報も入りました。それまで何の便りも無く、様子が全く分からないのを心配した父が、直ぐに伊香保まで国民学校6年生の弟(栄一・高4回)と3年生の妹(義子・土浦二高昭和29年卒)を迎えに行きました。2人が父と一緒に土浦に帰って来た日、私が急いで学校から帰ると、痩せ細った弟と妹とが、きよんととして窓際に座っていました。母は、虱だらけだった弟と妹との衣服を釜で煮沸消毒をしていま

した。使えない衣服は庭で燃やしたようで、その焼け屑が残っていました。その日、2人にどんな言葉を掛けたのか思い出せませんが、窓際の2人と母の姿だけは険の奥にしっかりと焼き付いています。家族全員が揃って、両親はようやく安堵したようです。戦後も、食糧難は続き、配給ではとても足りずに、闇米に頼る生活でした。桜橋に物々交換の店が出て、母の着物と交換に生活必需品を手に入れていました。

10月から授業も行われるようになってきました。当時、東京から疎開して来た教員も多く、素晴らしい先生方から教えることができました。

音楽の鳥井善次郎先生は、パイプオルガンの奏者で、月に1度、定期音楽会を開いてくれました。時には一流の音楽家を招いて下さいました。体育の授業では、素敵な大関たか先生から正しい歩き方や社交ダンスのステップを教えていただきました。また、自分の好きな童謡を選んで、体で表現する喜びも学びました。とにかく楽しい体育の時間でした。戦争中には英語の授業が極端に減らされていたので、英語の教員が少なかったのです。英語は商業の中村先生が担当されました。先生は、黒板に最初に日本語を書き、次いでそれを英訳して板書してくれました。私たちは先生が書かれた文を必死にノートしていました。専門外の科目を教える先生も大変だったと思います。その後、英語がご専門の山口勇吉先生(中27回・本校第15代校長)が赴任されて、「蛍の光」の原曲【スコットランド民謡「オールド・ラング・サイン(Auld Lang Syne)」。英訳すると、逐語訳ではold long since、意訳ではtimes gone byとなる。】を英語で

教えてくれました。農業の実習では、日谷広先生に「お前は転校生だろう、何だ、その鍬の持ち方は！」と叱られました。東京育ちの私は、鍬などを持ったことが無かったので、成績は、案の定、優良可

の「可」でした。どの先生も、個性豊かで、一所懸命に教えてくれました。今でも、当時の先生方の授業風景やその面影が浮かんで来て、懐かしい思い出となっています。

学校生活が落ち着いてくると、部活動も復活するようになりました。テニス愛好家の酒井先生のご尽力で、テニス部も復活しました。父からラケットを与えられ、テニスの面白さを知っていた私は、迷わずテニス部に入りました。テニス部の活動は、コート造りから始まりました。校庭にあった防空壕を撤去し、学校菜園であった畠を整地して、ローラーを掛けるとテニスコートが出現しました。朝は始業前、放課後は暗くなるまで練習に明け暮れました。空腹ではありましたが、戦争のあの苦しみから解放された、平和になったその喜びがコートに溢れていました。今でもあの戦争中のことを思うと、テニスコートが再び防空壕や畠にならずに、いつまでもストロークの音と歓声とが聞こえる場所であってほしい、と祈らずにはいられません。

鈴木春嶺校長、椎名茂雄教頭をはじめ多くの先生方が、私たちの練習相手になつてくれました。土浦天狗クラブの小父様たちも時々コーチに訪れてくれました。部員たちは、勉強もよくやり、素晴らしい仲間でした。みんなの後押しのおかげで、前衛の私は、後衛の難波(小沢)和子さん(土浦中学で英語を教えられていた小沢永次郎先生のご息女)とペアを組み、県大会で準優勝し、1947(昭和22)年【土浦高女4年時】には、石川県で開催された第2回国民体育大会に出場する(こ)とができました。

新制高校発足

1948年4月、新制高校が発足し、私たち1944年入学生は、高女5年【1946年3月に出された「中等学校修業年限延長二閣スル通牒」により、土浦高女では、本科が1年間延長されて5年制になっていた。】と新制土浦二高

2年とに分かれましたが、授業は同じだったように思います。

1948年だったと記憶していますが、修学旅行が復活し、私たち1944年入学生は、土浦二高初、高女最後の修学旅行に出掛けました。行き先は日光でした。日光駅までは東武電車だったと思います。東照宮や輪王寺に参拝した後、日光軌道の路面電車で馬返まで行き、そこからケーブルカーで明智平まで登り、その後は、砂利道のいろは坂を歩いて登りました。みんなでおしゃべりをしながら楽しく登りましたが、年配の先生方は、大変だったようです。帰りは、いろは坂をくねくね曲がるのは面倒、と真っ直ぐ降りて来た強者もいました。華厳滝では滝壺まで降りられましたが、高所恐怖症の私は、足が竦んで、とても降りられません。



日光軌道のループ線(国鉄(現JR)日光駅前)

日光軌道は、1913(大正2)年、日光駅前～馬返の全線が開通した。山道を行く珍しい路面電車で、標高838mの馬返は国内最高地点だった。1965年の第2いろは坂の開通により、1968年に廃止された。東武鉄道東向島駅にある東武博物館に当時の車輛が保存されている。(『なつかしの日光軌道(1968年)』より転載。)

夜は、中禅寺湖畔のホテルに泊まりました。食事を済ませて、部屋に戻り寛いでいると、何となく静かになり、そのうち誰かがしくしくと泣き出しました。私も、山道を歩き、静かな湖畔を目の前にして、このような大自然を忘れていたことに気が付き、何となくセンチメンタルな気分になっていましたので、泣き声に釣られて涙が出てきました。私たちは、

満州事変、満州国建国、国際連盟脱退、と日本が戦争への道突き進み始めた頃に生まれ、戦争とともに育ってきました。《欲しがりません、勝つまでは》《足らぬ足らぬは工夫が足らぬ》と犠牲を強いられてきました。空襲の中、生死の境も潜り抜けてきました。戦後も食糧難は続き、生きるのに精一杯でした。こうした緊張感が、湖畔の静けさで解き解され、ホッとした気持ちにもなったのでしよう、みんなそれぞれが涙ながらに眠りに就きましたが、あの涙は平和の喜びを噛み締める滴でもありました。

茨城大学進学

翌1949年3月の卒業式では、1943年入学の先輩【土浦二高第1回卒46名】、1944年入学の同級生【土浦高女本科第43回卒275名】、1946年入学の後輩【併設中第2回卒115名】を送り出しました。同時に土浦高女と併設中とが廃止となり、学校は、土浦二高だけになりました。私は、新制土浦二高3年に進級しました。新制大学も発足し、主に新制高校第1回卒の方々が進学しました。しかし、茨大では、定員に満たなかったため、9月に再募集が行われ、この再募集では、高女卒でも受験が可能とのことでしたので、私も、土浦高女卒の資格で受験し、教育学部中学教育科2年課程に合格しました。極度の教員不足を早急に補うため、当時の茨大教育学部には2年課程も設けられていました。4年課程も考えましたが、父も退職をして恩給暮らしで、母の着物を売って生活費に充てるような筈生活でしたし、弟・妹の学費も必要だったので、早く教員になる道を選びました。

10月3日に入学式が挙行され、半年遅れの茨大第1期生となりました。学費は、育英資金(月額1800円)を貰って何とか遣り繰りをしました。当時、教育学部の土浦教場【茨大発足までは、茨城師範男子部・女子部が置かれていた】は、現在の土浦三高の所にあり、土浦海軍航空隊(予

科練)適性部の建物を校舎にしています。校舎と言っても、空襲で傷付いた古い木造の建物で、教室には使い古した机と椅子とが置かれているだけでした。戦後購入した立田町の自宅から大岩田の教場まで歩いて通いました。専攻した国文科の女子は3名で、私も含めて土浦高女出身が2名、茨城女子師範から入られた方が1名でした。旧制高校や師範学校の先生方が教授になられていましたから、授業は大学に相応しいレベルの高いもので、毎時間きちんと教えられていました。私たちは、小学校の時から戦争に翻弄され、まともに授業を受けていませんでしたので、学力不足に悩まされました。特に戦争中には敵性語とされ、授業時間が減らされていた英語には苦労しました。それでも、空襲を気にしないで安心して学べる喜びに、楽しく教室に向かいました。先生方も、辛抱強く導いてくれたと思います【茨大教育学部土浦教場は、1951年3月31日、陸軍歩兵第2連隊(パラオ諸島ペリリュー島で玉砕した。)の跡地に設置された水戸キャンパスに移った。土浦教場の校舎には、同年4月1日に、土浦市立高校(現土浦三高)が移転した。】。

教員の道へ

1951(昭和26)年3月、中学の国語・英語の免許を取得し、中学教育科を卒業しました。最初の赴任校は土浦二中、19歳の春でした。

主専攻は国文科でしたが、副専攻で学んだ英語の免許も持っていたので、英語と体育の授業を持たされました。英語は新しく設けられた科目なので、全体に教員の数も少なく、土浦二中には英語の教員は配置されていませんでした。授業は苦勞の連続で、毎日、教材研究に追われました。1953年2月1日から、テレビ放送が始まりました。英語の教育番組を授業で使いましたが、校長から「高校入試にリスニングは無いので、受験英語をもつと教えてくれ。」と言われたこともあり

ます。体育は、土浦高女時代の恩師大関先生の授業を思い出しながら、何とか進めていくことができました。

戦後も食糧難が続いていました。そのため、アメリカからララ物資【戦後、アメリカの宗教団体や慈善団体などから成る組織LALA(アジア救済連盟)によって供与された食料・衣類などの物資】の脱脂粉乳が配給され、給食で飲まされました。不味い、と不評だったので、間も無くコーヒール味が添加されましたが、私には、最後まで飲み慣れない代物でした。そのためか、今でも牛乳が飲めません。

敗戦を経験した私にとって、生徒とともに学べる喜びは、何物にも代え難いものです。私たちは、戦争によって学ぶ機会を奪われました。敗戦で、日本国中の教員誰もが、「戦争は嫌だ。平和の大切さを教えていこう。」と決意したと思います。私は、教え子の一人ひとりが学ぶ喜びを感じてほしい、との思いで、33年間教壇に立ってきました。教員としての実践活動は、又の機会にお話したいと思います。

(注)併設中

6・3・3・4制教育の開始とともに、旧制中等学校に在籍する学齢(義務教育を受けること)が適切とされる年齢生徒の新制高校への入学のための措置として、1947年4月からの2年間は、中等学校に併設中学校が置かれた。1947年度には新入生を募集せず、旧制中等学校の3年生(1945年度入学)は併設中学3年生に、2年生(1946年度入学)は中学2年生になった。1949年3月の卒業式では、1943年度入学、旧制5年(新制高校1年を修了した先輩)土浦二高第1回卒、1944年度入学、旧制5年を修了し新制高校に進学しなかった同級生土浦高女本科第43回卒、1946年度入学、旧制1年(併設中2年を修了し新制高校に進学しなかった先輩(併設中第2回卒)がそれぞれ卒業となった。

※栗栖恵子さんのご主人・三男さん(中45回)も土浦中学4年生の時に1年間(1944年7月から1945年6月まで)、航空廠で動員生活を送っていたが、そのことを知ったのは、結婚後、三男さんの同級生である渡辺光夫さんや栗山光夫さんたちが自宅を訪れ、航空廠での思い出話をしていた時だったそうである。